新題林和哥集

巻十　冬之下

和書門 類
二七〇七七 號
六 函
二 架
一六 冊

内閣文庫
和書 類
二七〇七七 號
一六 冊
三 架
二〇一 函

| 内閣文庫 | | |
|---|---|---|
| 番號 | 和 27077 | |
| 冊數 | 16 (10) | |
| 函號 | 201 | 17 |

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
原本の文字など不明瞭な箇所があり

国立公文書館
National Archives of Japan

新題林和歌集巻第十

冬哥下目録


水鳥 曉水鳥 朝水鳥 池水鳥
江水鳥 月水鳥 水鳥多 水鳥別
岸水鳥 水鳥近蘆 鴛鴦番浦羽 鴨
池鴨 江鴨 池鴛鴦 芦間鴛鴦
網代 月照網代 網代寒 氷網代
河網代 名所網代 霰 氷霰
野霰 冬野霰 屋上霰 竹屋霰
園霰 水上霰 籬霰 籬上霰
竹霰 柏霰 霰打篷 旅泊霰
残雁 寒天旅居 田舎居 雪


明治十二年購求

初雪
浅雪
暁雪
暮雪
遠山雪
松雪
枯葉雪
原雪
寒夜暁雪
河雪
浦雪
田雪

水辺雪
深雪
朝雪
連日雪
雪満群山
松山雪
林葉雪
関雪
行路雪
湖雪
湊雪
都雪

山初雪
雪逐月涼
雪朝
雪夜風
嶺雪
岳雪
野外雪
寒夜雪
雪埋荒径
海辺雪
濱雪
花落雪

庭初雪
積雪
夕雪
山雪
谷雪
杉雪
野浅雪
寒路雪
橋雪
海辺松雪
渚雪
温湯雪

禁中雪
遠村雪
山家雪
閑中雪
垣根雪
雪似花
松雪深
杉雪
嶺樹雪
雪中鳥
雪中待友
雪朝眺望

社頭雪
隣村雪
山館見雪
庭雪
竹雪
篠雪
雪埋松
杉原雪
雪朝遠樹
雪中歎
雪中来人
雪中興趣

古寺雪
里雪
田家雪
庭雪深
竹雪深
松上雪
風拂松雪
枝雪
雪庭樹花
雪中待人
雪中渡
雪夕述懐

旅中雪
遠里雪
閑居雪
庭雪厭人
竹窓雪
松葉雪
松竹雪初霽
雪変木雪
牧場雪
依雪待人
雪中眺望
雪中述懐

寄雪猿
比良暮雪
時雨雪
呉竹時
壺炭竈
炉火
炉辺閑談
暁神楽
寂孔仏名経
庭早梅
寒草
寒草思

猿声雪
鷹狩
時雨霰
郊竹時
寒炭竈
炉火寒冬
坐上炉辺
新神楽
早梅
梅告春色
寒草霜
山寒草

嶺中雪
時雨風
夕竹時
炭竈
埋火
炉火似春
神楽
枯神楽
年内早梅
推
情寒草
関寒草

雪瀑泉氷洞口雪
雪中竹時
竹時月暮
炭竈煙
除夜埋火
向炉火
月前神楽
佛名
早梅春風
年欲暮
寒草色
寒草澗水

寒草帯氷
都鄙寒草
寒草松
除夜
冬暁
冬夕風
冬暁山
冬沢
冬柏
冬鳥
冬車
冬園鷺多

河寒草
夜寒草
花後寒草
冬月
冬夜
冬夜長
冬郊
冬舟
冬桐
冬鷺
冬燒
冬眺望

路寒草
市寒草
春漸至
冬里
冬垣
冬郊風
冬瀧
冬植物
冬竹
冬獣
冬鶏
野行幸

深居寒草
寒草梅
春已卜隣
冬雨
冬風
冬地儀
冬浦
枇杷
冬気物
冬衣
冬夕
維摩会

大節　豊明節会

# 新題林和歌集巻第十

## 冬部下

### 水鳥

冬のきてなれたるねおしかもみちかくしもおなしところとたれかしる　仙洞

かりのゝみきはの鴨の羽かひにもはらふ夜のしものさゆけさ　基熈

めつらしくかゝれるみきはにわかれてはいそくはゆく池の芦鴨　資熙

池水のすみけるはちかくきぬるをりふしをしも見やすらへん　通茂

こほりやむすひぬらんは親ともみえて夜をわたる　水鳥

うすらくむれもちりなん池水にあやなくうかふ　水鳥　実業

こほりにもなれてあさりもやさし池の水鳥　公規

池水のふかきのむかしをとめてすむあしのうきね　雅豊

山川やはやせもおしなへてすむ鴨のうはけの毛衣　為綱

新なる沢田の月にねさめてやあさ夜のつはさ一つに　実陰

夜の霜はらひかねたる沢なかき池の水鳥

よしさらはかりの床よ寝もしよ羽せしもさきき池のをしとり　有誠

暁水鳥

流そそくさらく川瀬よあけはその月もありあけそくとをしも　道晃

湖水鳥

さゆる夜は岩ほにつれて鴨とほりさけゆく波よ浮ふをしとり　道晃

池水鳥

うらも緑と流るや池に遊ふ鳥の池の秋房にかはらぬあしかれ　通茂

よはひをくらふ浜ちさの鳥と見て日数あまた池の水鳥　資茂

ふらひとゐるもの鳥は秋の夜の色に馴れて池の水鳥　俊広

芦かりのこゝろさしありし池の水のもれともかきねやことらん　定基

こかりのそらさきへむせはいはやまふそら池の鳥　為久

江水鳥

ら枝よのこしあらし乃まかせや入江の浪よ浮ふとかも　有萬

川水鳥

夜もなかくやうきまのゆきしめくりて寒の水鳥　後西院

山ちかし人も聞ぬる川風よやとかれぬ空にをおくる鴨　仙洞

ゆくらかはくらもなくれ河の波よいろいそをしの一つかも　季縁

りう入川のかもさたてうたふよせて浮かふ波のまにかも　実業

水鳥多

むれてそゐるそも寺(?)みる洲流の鴨つきそけて池のをしかも　仙洞

池水ふしまてあをきや空(?)のゆさ鴨ねさめくりあそふをしかも　通茂

あさりする衣沢のをしはさかれは浜の鳥も浦ちかくて　実業

池ちかく宮のくにそのうらか面をみてやなかれをしかも　通躬

山川よのまちおちのかもふさたてまくそれつくるかへく　輝光

山川やうらの流れさそひつむしの浮を眺にあそひなあかり　実陰

こかりとちさしきめ(?)もいとそてむしまちうけて池乃をしとをは　經光

水鳥馴

池水よ川の袖ちかくすうらまてあそふわかねそしれも衣　後西院

世をのかるゝ

なつこえや粉の河おしのむねかくはけくうるへきうきおもる　積恭

みる池三源

鳥月をみし世のかけうらもさそふまてかりおもひかゝる　正仁

鴛鴦浦邨

日かけさへ池のこほりそあはれやいかゝたえしへてあはれおもひかゝる　澄盈

鴨

風さむき○の床やさひぬらんなれかゝり汀ふきさらしおもしつゆき　惟庸

河波のこほりぬらしてひとりきく鴨をさそへて鴨なれのりしむ　重條

池鴨

池みつは波のこほりもさゝれくやさえかりの床ま鴨のふくらん　素然

池みつよりかし河おもの水乃声ちゝひるりしてや鴨乃鳴くらむ　資茂

霜くらく飛ふ風ものいふふきうへんみさむふきらく池の芦のゝも　宣定

川鴨

おすしもとまくらふ舟のとまり風ふかれてや鴨ものうりさうふ　雅豊

池鴛

霜やらきねさしむやふる庭の池よつらぬきしのひかそのなかま　雅光

池むすきこほりのうへにも床なれて鴛○のそしやそしやらむ　定基

芦間鴛

それゆゑこれのそとそをのそむすむそれのさ○やあふる芦乃上飛ふ　実陳

網代

霜霜のはなへておくりもさむむねきおもひの○もむそれ　基熙

おり宇治のの川風さむきねさむ夢みそしれおもひかみの床　基福

霜あられさゆるたゝみへとこそ床すさまくしやらなれおもひあかかみの

○くれ夫のゝもさゝへうそれあらうさいおもひの床も霜やそらん　兼然

あさうくれかうちよ夫とあるあらそ床池みのなかりのおもる秋涼さ　実陳

月照網代

よるむくれ秋のうらゝも綺ちらねおもひ八月秋のりのはやうせて　実業

網代辺

うち火のあかりもさむき川風に袖よりひえてやおもひかるらむ　仙洞

かゝり火も氷にきえも消つゝたえまうしなおしろの底乃槙やさかしらん　実陰

あかりうへの流の浪よるを引けて照らさむし秋乃かり火　通躬

むしろのうき浪のよそめも宮こゝ秋はりう袖さそふらし冬かゝる末　雅豊

もろ袖やいりさうなあふみかへめくる行くむし浪のせにかしらかき　輝光

川の瀬はおりよる波のかけり秋はり手かゝらし氷もさむしきと　為綱

海うせのさしきにきえくもりうつさも我身のこゝろ本ちりせし　行豊

氷網代

あけゆかハいさよふ波をとゝすゝし川風いつふかるゝあらし末　通躬

風さむみうすれの川かしらも猿ともしきまつさやかしら雪

河網代

もとつあみしらもうりて冬川よ妹とめくるゝらふかしろ末　為綱

名所網代

やのくちせぬかわ浪おちてくだりそ海やいづらなかれ末　仙洞

よしきかやへひをまちてけし姫のくさやし終らうおろ末　通村

霰

庭の面へ人めも雪もうれしくておもしろく霰はそひにき　後西院

さらしなやされはれくのいふかん弁山もけさはあられ音かさ　仙洞

一むらのあられはすみかうりあとくひよふかくち行の所秋風　通躬

霰さやく吉川かさ庭のそよ待し比秋さむしとそへておもれかさ　通福

みのかされハ待しもゆきしさもおもしれの玉そりてくゝらう　光栄

初霰

雲守ゝうつまふかへてありゆの白札林ふ一ひとちりあられうふ　通茂

やすかれし旅やの宿くれ乃そとこえてするあられハ笑りのこゝに　意光

ちくれなふ行まつさ秋の色は所まてちてこくあられなる　雅豊

路霰

一とまり山風あらく吹そひてそあられまさやくめぐる乃さとのこゑ　基福

夕くれハいつもあはれの山風にけふ秋のあさちあはれなりけるまて　公業

名所雲

さらしなやたちかへりてのきはやあはれなる秋の夕くれ　尚仁

屋上雲

ありさりつる軒もれあはれ絶まにうつるもおほろなる白玉　仙洞

さをしかの声もあはれにたくひなきけふの秋の月かけ　実業

かきくらし秋の夕へにいまよ梢やのうへにちるや雲の声のよふかき　重條

枝の屋のあはれよふくさけてやはらぬるのちハ声をもらひ[illegible]　通躬

はつしもの枝の梢屋よりふる声ハたゝ雨のふるに雲のしそこなく　雅豊

ありすむ秋さらにしほる笹の屋よりしまはそよふるハ乃雲ハ　為綱

いそやとく姫の声をしむ梢やのうへあはれしらぬもの秋ハ　輝光

古屋雲

枝のあはれありあるやうハ秋風よりはるかなるあはれ月ありけるかな　相尚

田雲

なかれ秋とゆくてもおもひんかくさひ雲よそさけてあはれかな　公延

江上雲

山川やきよく流よこゑとかつ瀬よそてけて秋もちるあはれならむ　資廉

籬雲

色ふかくあさ露をたちからみかりあはれなりけるかな風のさそはら　通茂

庭もりあさき梢の声やてらん秋もはるかなる笹の露をうつら　資茂

霧さめやくもる山かけに風すせんあはれなる秋かせつくら　資茂

溪上雲

ふかれくもんかるやあはれのは乃岸に秋のくれハむかしの声や梢とを　仙洞

霧はやくとくもさひしけさ笹の秋ハあはれなるまて嵐そつく　通茂

世しろハむかしのとよりてあれたのの雲よりかくふるあはれなる　実陰

霧はよさ入はやくなさひさ小笹かしかくともてあはれなる　資時

ひあさらとも遠乃さくらし風はくてさとのしきしくふるあはれ秋の為栄

うらそよれ風よあはれのちる声もつむしくも秋の夕への庭く気　公野

竹霰

さそひくる風のおとかはまかふ竹の葉にみたるゝ霰の音そけき　為綱

枯霰

あはれしもかころかち霰を梅ちらこれちるや霰の音そ寒けき　通茂

かしら真柴やの枯葉にはあられのちらち音そ寒けき　資茂

あけかたの秋よ八たひ落ちる中霰ときゝ　相尚

霰洒音

暮れかゝる門おとかき窓にあられもやりて声そ聞ゆる　仙洞

ひとりゐのさひしきねやの霰をも音ぞ寒けき夜の友かな　基熙

さ夜ふかく山風おちて降るのこゑにあはれ枯葉のなかに　通茂

ふる音もあはれなりけり夜深き窓にあられの声そ更ゆく　実業

ちりすきてまたふきたつ霰かな風のこゑにも時雨降るよ　実陰

稀見霰

梅りあしわかれのまた霰ふりてよはの枕そ寝さめかちなる　季然

まれのかせよとをあられのふるさとひとり稀なる　通躬

残雁

春のゆく小田の稲くきかへる雁をあはれさそふ　基長

ありつひとの山ちる花を今はかへりてかへる雁　実業

枕にもかり音のこゝろ中あはれてかへる雁の山路　武信

夕霞よそにや宮こをわかれてかり田の面にかへる雁の杣　惟永

かへりゆく雁をみよそれる雁枕よそにかりの一つ　尚長

暮天帰雁

越路よりなかれてゆく暮の空になく雁のきゝゆらん　公長

田帰雁

かりの旅にしらて花も霞もなく小田の雁はきゝゆらん　為久

かきくもり雁の空をみつゝ田の面に帰る雁の数　光栄

雪

ゆりつゝそ枝とよそに散るさかりの花みるかりのことしもまたさき　仙洞

ふる雪のかさなる山のあさ日影まつに木たかく見ゆる朝けは　仙洞
猶さえわたる月影をあかす寒夜のそらに雪ふりくもる　基熈
ふりつもる雪そなかなか山ふかみ人のかよひ路たえてかへる　道晃
きえのこる雪にかよひし松の葉のしつえもあらはなる　実兵
あさ日さす雪の光にうつりあふ松のはやまのかせにちる雪と見ゆる浜　通茂
それなからしつえの雪にうつるらん冬の庭のあさけかな　雅喬
ふりつもる雪をそれとやふりつゝ雪ふかき人のかよひ路　資茂
なかなかにそれともしらぬ雪の日にかけよる世の雪にゆく人のかほ　雅庸
ちよふるの松のしたはにふりつもるあしたの雪の色そのこれる　光雄

初雪

庭の面にうちちるほとの初雪やさすかにけさの初雪　仙洞
初雪やかすかにみえし庭の面の雪　道晃
たちまちに見えわかれぬる初雪のあさきかな　光雄
このあさけみねの松かえに山の初雪　雅豊
今朝この初雪や山の人もなかやまの初雪　実陳
峯にかゝれる雪にけさありてかゝる庭の風のさむさを　通茂

山初雪

秋の月もしらぬそのまゝ初雪の山の月のかけさえて初雪　後西院
冬さむみ松に風ふく初雪のあとこそみえて　弘資

庭初雪

冬ふかき月のかけもさえて初雪のちる山の月　景忠
庭の面にふる初雪のあさきかな夜のかけもしろき初雪　後水尾院
こゝろさしのちらぬ初雪の白きかな　仙洞

深雪

さえわたるしらゆきのふかき庭のけさ　仙洞
おもふにもしらぬ宿の雪のけさ　智仁

きゝさへまたくむすふ今日か雪をつもりは雪にふることりなし　以資
おくふかきそれならぬ庭のかきねにうつもれつゝあしけるは竹の雪　通茂
かれはりと見るも色をよりかくる池にあて比そりつゝそ深ら松の雪
まくれつゝ日数ふりつる庭の面にふりそふる雪そ思ひやらるゝ　雅章
山ふかく深りつる雪のやすらふ夜半かゝけさ庭に雪　基福
つもりそふ雪はつもるる背のかたの深さみきりに雪の山のかたしけれ　実業
たえまなく降りしく雪もあさからぬ跡わけかぬる庭のおもかけ　実陰
うつもれて深さ深ら松の枯葉もともしつもりて跡もなき庭の白雪　資音

深雪

下ともえ枝を見むとまつ松がえや雪のつもるはかけらからん　基淵
けさよりもるの山のはふりし夜の山も雪の日をはかり　時方
今朝ふるは深りつゝやつくるほとも深からぬ雪の庭かな　雅喬
深りつゝたえて行人もたえぬるさまそつもりて松をうつもるゝ雪　宣定

雪逐月源

さえくるとふりし雪のあかりのせこつゆくみえ庭のさゆる雪　隆職
見る月に深りつゝ雪ふかきや里の庭にかゝり道　道晃
まつてたゝしかふりつゝもあとなれぬ雪の月の色をかぬる哉　通茂

積雪

杉とよもぞつもりつゝ雪のつもり庭の松のあらし八　実仁
かたえ行人つれにて中くれおもいつもりけるは雪や　好仁
山風をさしはらふ雪に松そたへて見えけるは下枝　季吉
さかね日の深りつゝさともふかくれて雪の庭の松の雪　基淵
庭の面よ積りつゝ松に中ゆく日をつもりてみる雪かな　雅喬
ふる雪のとくるもへのせのひをさとをそて松とも降けさ　秀吉
深りまさりゆきつゝのうらしをむてつもる雪に積もる山の庭の　為茂
人とふも昨日むくらの梢もうちかさのもとの白雪　資清

暁雪

くれ竹の葉すゑにさはる音も猶しめりてさゆる夜の雨の音　通茂
ありつゝもこぬ夜しるしもまさる雨の音をも聞くに寝られやはする　宣光
ふる雨に流れておちる音ならし雨ふる夜の月の影なしや　光栄

朝雨

くれ竹の葉分の音にきゝわけてあさ雨ふれる山のはのそら　道晃
かきくらしふる雨のしたに明そめて山の端かけて晴る空かな　資茂
朝まだき雨ふる空の雲はれて山の端よりもみゆる日の影　次資
またきよりふりけて雨のみの山の尾上の雲もはれゆく日影　光雄
ありかたく今朝のあさ雨もやすらはて山の尾上にかゝる白雲　資茂
はれやらぬ雨の雫の露けさに山のはかすむ明ほのの空　実種
さえそへし朝の嵐や雨とならむ春の夜あけの山の白雲　隆豊
ちる花の影のうつろふ朝の雨とゝまる雲の山のはの空　経尚
あさなけに晴ゆく雨の名残にて立そふ雲の峯のしら雲　時之

雨朝

おほ世の人かくつもりてねりのよそほひけふもさめぬ雨の名残も　後西院
花のみちゆくへもしらぬ雨の夜やせかむ雲の行方なれ　資奉
さみたれの雨のふる日は今朝もなほ神のみとりにかゝる雲かな　基福
なかめやる雲の行方もまたはれぬ山のしつく雨そふりける　実陰

夕雨

山のはややゝはれそめし雨にくれ竹の露こそおきもしけれ　宗顕
きのふけふはれぬ雨にて夕くれの雲の夕ゐる山のはの空　季賢

秋雨

いそのかみふるの秋雨のかれかれに月もなき夜の雨ぞきこゆる　通村
袖ぬれてうき秋の夜の月影もかくれて雨のをとのみぞする　俊辰
月影のおほろけならぬ雨の夜はまつ秋の夜の雨の名残に　雅豊

連日雨

きのふけふ時の雨に日数ふる秋の雨にはさらにしもなし　後水尾院
かのみかけしけさの日数もつもりて雨に日数のつもりぬる哉　実業

雪後風

ふく風やこすゑの雪をはらひくれぬよそにくもりて　資堯

そなたの軒のこほりて風ませにちりかかりぬる雪のかれ行　具起

山雪

とれふ山ここは夜半にしらえてうつもるさへもうつむ白雪　実陰

遠山雪

この秋の見えし雪は大和やまさ○あとはけさは見ゆらん　光座

雪満群山

松枝につもれるこそ峰の山のさかの雪ふかやけさ　実種

嶺雪

ふねちるむかしてこそ初雪いそくつもりけれ　仙洞

松ねかくかさの峰こそ白き峰の山とさへ雪されて　通茂

うつるまやもより峰の雪は雪ふとその里けさはつれ　実業

都かそらまみえしたひえのさねはかりに降りの初雪　重條

むしろの光もそひて月の影やく峰は雪なりさ　通躬

たむえやはくふ山にかくれてひかりさかさ峰は雪　雅豊

残ぬ月の里よりひかりさ雪は影かつらき峰の白雪　実陰

冬ありの夕の雪はけされて○さやかにつもる雪　公緒

谷雪

ゆくそらの花とみえてふりて雪をむかりぬ谷の下陰　公長

松雪

まれりえよ秋立松のみするそあめ夕とのことも雪の色さと　信平

雪ふれはさかの松やま山むとつもむ木の影より深めぬ　徳仁

とのくえの雪てゆくそ残つそてあわれけさ雪の松山　実業

家木はをさて松木の枝りまさへをさけさの白雪　景忠

松山雪

おりひさらはの松のそ人や雪ふりとて見りくらぬ　実種

暮雪

松にあれと非らぬとんけさの雪に続くつらぬ嵐にかへる里　仙洞
さひしさむしろさ分入る嵐のふれゆくしまれよ雪の夜ふりて　後底

松雪

うち路のわしさ分んにもとふる雪にうれてのこらぬ松の下草　良恕
松枝のわらしりけさはふりつもれて松の積る雪に弱けき　正仁
夜のかしれ名残さの松は風もして千枝滴しげき朝の雪　雅豊

松間雪

雪ふるらくふかくもや見枝をこゝらぬ名よおふ松の積と　通村

林間雪

あらましれ竹のくれしの下風も雪にまつかれ里の明けれ　重隆

野外雪

立ちまよ人もとの道をてらさなく雪のふりつもる跡も　通茂
行かよふ人のいてらへおとふれて道をまつく野への白雪　淳房

野径雪

千さとのみちもこやとらくへ出るゝへの雪に道芽なきひかりと　通茂

京雪

行く波もこふりかゝく浜風よ雪ふりつもる都のあしたの京　雅喬

関雪

とまるは折るつゝも夜路の逢坂山こゆる関路の雪のあしたよ　公洗

関屋雪

とひよしむ関の戸ゝ屋もふる雪にかゝるとまりぬ和坂の山　惟庸

関路雪

関の戸れわくる跡なきをも初ゆき花をけさの白雪　仙洞

関路暁雪

美の戸ふるさ明の月にまさ雪くもり滴あふ坂の山　光庭

行路雪

ゆく人の道さえもありのあとも見えぬ雪の道にのぼ　資茂
つりする枝より跡つもる雪ふけさゆる松にかへりし　光雄

ゆかしさにおもひこしもえぬ雪にうれたりの里ゆけむた　公綱

きのふともたえぬ海よりしからくの跡あとゝ千すのかゝの白雪　淳房

雪裡昔煙

山人のゆききもたえし奥山も雪ふりつゝむ昔の細道　定基

橋雪

ありしのきはけさはかよひてふりつゝ雪にわたるさえ入り橋　乙長

河雪

いはこえしつりもあへぬをとの風さむくいつくは舟まて雪　道晃

うき瀬川てらひつくふ雪かゝらふくるみぬ暮のたかねかり哉　淳房

湖雪

すみたるやみのうくのかよひちも雪まよへゆくの影をしもり　基熈

おきつてくみとふるみのさゝの浦やとかりけり雪ひとつのさゝれ浪　通村

しかのの山雪ふさおくれ風なくて一むらくもの遠ふる波　基賢

海邊雪

おきつ〇つ雪をまさやうく浦風のはら沖津浦山　後水尾院

おきつ浦風さむきゆふへの山からいふもくらむ雪にふれて浪　仙洞

浪のうへよ梅かおもかさかけいくる雪や沖の舟人　通茂

むらけふのこの松の風あらして雪よりあくれむらいそさら　時成

いつの浦やむしはも雪ふりつむ月はつるかゝる田鶴の鳴く人　季賢

すさめしみなよる秋の月やとる雪ふりしくひ浪の鳴くの　玄光

海邊松雪

千すゑのなかさ浪の聲をともにきしの雪の松かえ　道晃

千さこれは雪もこそ浪よりは鶴の松はみとりの色もわかて　資孝

浪よしの松にとられし雪にふられてすこしいさわら鶴山　雅直

よせくるる浦の波よそふきまて松をつくは雪もつりかともさき　雅直

浪のそゝし松風ふしてあくるまよ雪もとらさせうわかしれて　雅喬

浦雪

あさ人のいらふもかゝやくつもりて浦の雪のうつるかな　相尚

淺雪

ねさめしは猶あさくみえしかとよしのやまやかて雪のつもれるか　桐尚

濱雪

松か根にせこえてかへらぬ浪の色と雪ふりしきるすさきの濱　為綱

うちよせてかへらぬ浪のしら濱と見えしてうみの雪そつもれる　光胤

湖雪

波のうへよ浦わたるへてこそ海のおもかけしろき雪のつもれる　仙洞

梅の花浦かへてさ波をいろそへて雪ふりつもれおもしろき山　通茂

しれしなくあまの釣舟も浪のうへは雪の千重さす沖の釣舟　文業

沖わたる雪ふりしきれは舟もしろくみえて浦つたひ沖の小舟も　淳房

ゆく舟や雪に風さして雪に浦つたふ波の色も白きを　重條

みわたせは海のはらりの湖水はるや浦つたふ雪　實陰

いさりせし波もむかひの雪そうけて雪そつもれる　行豊

しら浪も乞ひかへりふりける雪をはらふ浦風　惟庸

田雪

ゆくしはのあとははるかに田面の雪をつもりかりし雪　輔實

あさかけてかへらぬ雪のふる影も見えぬ田面の夕暮の雪　重條

郊雪

いくさとも雪ちる夕のはるかにもかきやみのそもりの山く　仙洞

山さとのやみのおくのふかきに雪もふかくそやまのけさは　行豊

あさかたのすそのの雪にふかきはまゆくうきわたりの雪　桐尚

暮路雪

あけくれにふるや雪をもわけてゆくらん花の都の雪をさへわけてかへらぬ　通音

海濱雪

ありそにむかふやこの雪に釣りしけきみのかもしれて　基福

うらなみをつもりし花へよせてやさしき雪そやまの　為久

禁中雪

たかきこのみやゐのうちにもふりける雪にかくしの九重中に　通茂

来しかたのさくらもちりしおはつせや滝にまかれし入相の声　実業
よのなかにうつろふ色をしらせてやのこる木の葉にかはる入相の声　公野

社頭鐘
明はつるかねの音ならしみねの松ひゝきあふ声もまれに白ゆふ　光広
神垣の山松のちかひ世に花とをしへて声ありなる響や　定基
松杉のしるくも神の宮に見えてそれのかねの声も更ぬそつく山陰　氏孝

古寺鐘
松よ梅くわしのことくもかりくれて神仏のうちそ声に聴けらし　輔実
ちりもむかしにかへるや鹿の声をつきて声にむかふ夕ひの鐘　雅朝

庵鐘
まとの戸に花はうへしとも思はぬ声もうつしみゆるかな　実業

遠村鐘
山里のさとの木末とりくしてそよかせにつたふる声かな　道晃
あくるまてかへるや声の松の松本の下いつかけて山陰　通村

かすかひつる滝の白雲をけしてあくる声より遠の山本　具起
うちひゝきこゝにもひゝくみねの声をのこしてゆふくれ山本の里　輝光

暮村鐘
このゆふへ吹きしきる雲のあなたより声ことに声もたえぬその一むら　永福

里鐘
すむ人のうしろよりゆふかたまてもこゝに此里の声に後めく　雅定
松よ梅くわれむかしをわすれてこの夕声はなつかしきこちこち里　公量
海より入里の中みち中くに声をはなれてかよふこゝせけり　行豊

冬里鐘
あさとりの山よかすむ声をかし声の風に残るさけ里　似洞

山家鐘
ふかきのさとはありかねのゆくしめかしにとほる声の山里　実陰

山館聞鐘
こゝろにはしめりつゝ声にゆふへとやりひそたゝ声のかよふ　基熙

田家雪

冬されのみかきすそ田の庵の軒ちかく山をうけてしらぬ白雪　実陰

閑居雪

訪ふ人ハ我のみやまの庵にしてあとも雪ふかくなりゆく　仙洞

とのつくるいほりはわれもてらふ人のあとをぬ庭よふかそかひよ　弘資

庭の面に我より訪ひとふ跡つけぬ雪ふかくわけゆくすかし　為綱

深中雪

人もまれにことのたえしみ山にも雪はいつしかしきさ宿　後水尾院

とはれぬもうらみわすれてつもる雪ふかき後ねとつもる雪かな　資茂

庭雪

ありそめてまたふむ人もなき庭の面ハ人のあとかたもなき白雪　道晃

夢さへもかれぬ庭のにはをもねがひけさの白雪　通茂

らせやしほしをあきらけし袖をかへつつ

庭雪深

さえしほる木の枝もうつれて雪ふかくらかなしき庭にみえてひさし　雅豊

訪ひりてことさらにかれても見れぬけさの庭の雪　公長

庭雪厭人

さとさの雪とふ人をよそれとへ跡つけぬ庭に跡つけん　通茂

酒後雪

雪をぬかさしよまたさそて雪も雪のそらにまちてまきこ　時方

竹雪

雪さやさわれ竹の葉に竹のよそれは雪みえてされ　仙洞

くれ竹のよにゆく雪はかきやらて雪のまに竹の葉　通茂

竹しらおもしろく雪ふかくつもれて竹の雪にひくれ竹　実業

ある雪のうつしやかにかとまよう竹の雪のしれ竹　雅光

まひろよりかうちとこし風あって雪ふきて竹くれ竹　

竹雪深

あるまつ風のそらねくれ竹をおもりとかれぬ竹のしらかせ　通躬

ありそふくみやこもしらぬやまさとの末松と竹の声かはらぬそ　仙洞

ゆりうつむかしのやまかけの竹の声のよそにたえぬむかしの竹

すかたこそ色のかはらぬ竹なからあはれの音の山にかよはん　通茂

かきこもる竹の林に風の音をかよはしむかしのなくなれ　資慶

くれ竹のよつよにたちてよそにきくよるのよそのこゑの音　実業

冬の霜をもつらぬく竹の葉にたつ風の音のさびしさ　実陰

竹窓声

ふりそふ雪にそなたの竹のきえもせぬ深山の奥の嵐かな　光雄

雪似花

花のちりしはわかれてあさきたちよりも雪ふりて竹の山松　仙洞

篠声

としのうちも雪のふるらんはつ霜にのこりてさえん声たえもなく　実種

松上雪

ゆふつけ声とおもふまにやかて松のしつえ　仙洞

さもあらはつりのやとにこゝろさへの声とすゝしくなかれ松かえ　光栄

松為声

それなからのこの松や声の中にむかしのやとにそのまゝをすらん　為久

松声深

たかふかき松かしきらん風のしらへよる声よその山かけの松　雅章

雪埋松

ひとつの松のこと葉の深きゆきにうつむ雪はつゐえ　資熙

風拂松声

なれてふるこすゑのあはれを思ふには松の声をや風さらふらん　光顕

松竹雪初霽

ゆりつもる松と竹との雪はけさはれて目にもさえかへるらし　公晴

松雪

かさねてもむかしのやとのことのはのひとつ文おもひつゝしのふ　通躬

橋辺雪

行く花のあとをよせてよる川音やわかぬむら／＼の雪のしら浪　公澄

枝雪

ゆく山や有りて只花の梅枝さへ色さむ空にも雪といふらく　実業

山家にはかきねかくる谷のうき木だにきえ雪にかくれしむねの枝もゝ　光栄

秋の色のふかさもねみゝのうちの枝乃花ちるも雪ぞつもりつゝむさるゝ山のもと　長義

雪埋木雪

花よりもかくれしにはしみ山木も松よ左右し梅雪をそめつきぬ　道晃

嶺樹雪

風ふけば花よ河本の松をしぬ雪をも寄すところの山の雪　通村

雪朝庭樹

行く雲くもりしこすゑも幾月数みれゆく雪見雪ふゆはらりさ　基福

雪庭樹花

花の色よ又も有りつゝ庭乃雪をまちしは梅さくは花まてりとむ　通村

狩場雪

ちらちらのとらうふりけてゆる雪みさむ道のりをかねみ狩りせん　重治

雪中鷹

秋寒にちらそくもとまる鳥乃をやけさふるも野やふきねらん　為久

雪中獣

狩りきたら小車をしとくともありて野への雪をてらさん　通躬

雪中待人

雪のうちもあとなきみちにかぎの戸をさしてもきえてと人をとひつ　道晃

あるはとはとも思ふいふぬ雪きえ雪をまちし人のたとえぬる小　通茂

依雪待人

ちとせ待てさらそてふるゆきとまりはてそとも待りつ白雪　後西院

うらしみちらぬともしほく人も人まち庭もしれ袖雪　資茂

雪中待友

たえずしふるよ枝のの花乃あまりし小まつる雪れあまかれ　光忠

雪中旅人

みのしろハいくへあくろてもかる雪にむもれするたひのくるしさ　資慶

雪中望

今日いくかむかつくの山にもり氷やこのゆふくれ雪のあをかは流　公業

風ふきて雪よりわたるのえりかへしらくさの山もさかの川岸も　実種

春まちてしらむ色もゝくやおりつる雪ハ不二との花ハはるの雪　雅喬

ゆくよきさ雪をとやこ嵐ふるに立かへるつきさへ雪やかある　宗光

雪中眺望

詠めてもむらふやわかねらぬ日の雪とんしりあさね野山かし　仙洞

時ふらぬもりきそのまゝや都夕にやこれかへの雪乃ゆかたれ　素然

雪朝眺望

朝日かけそれて遠つ嶺さ山のくれ松ありおつる雪れひてしら　資慶

あさかきに遠かなくわき波かありさへ雪ふさやけき湖の寒きさ

雪中興遊

さひしさも神よおもりくふりつる雪もまろかりてあさき袖かな　寛定

雪夕閑境

松よなかくわゝしも雪ふるゆふくれて梢よ涼しきまぬかりおの境　後西院

境のとしふるつもりて松枝もわかぬゆふへの雪れある寺　道晃

雪中山境

こつりきぬ境の道もかりて人雪のそこるやうつきの山　通茂

ゆふの雪ハおりしにふれて川も山路かくりぬ空の雪　資慶

雪中待人

うしと見る七十路ハふりぬる雪とつもれて来や待さまし　通茂

寒夜雪

けふそこしらしさそひよ友ゆへて雪をも月をもまつ夜中也　為信

旅宿雪

ゐとひ支ふや涌ゝるん寒まくらいむさへ末路につもる白雪　公晴

羇中雪

ゆくぬしん山路にしられくそひえすく軒の雪ふかき人はしら　弘資

あさかひぬ我住かたの梢もいつかうつるらん山のけさ此ちら雪　資茂

雪瀑泉苑澗口寒

山風のせきこえてくやこほるらんやとく谷にたかくこほる雪の白浪　通村

江邊暮雪

かきくもり暮れゆく江の雪にそめて釣りのこる跡は雪にかくれけり　後西院

鷹狩

とふ鳥も見ふるり落す狩衣も翁さへいつか袖の雪をしらさは　仙洞

雪ふる空みやすくれみかりのの日もあらそ葉のしたしとて　道晃

あられを狩くらしても立かさのたもとかつ散る雪ふきみせて　忠幸

あはてやとても狩りゆくやかりそれきこれ山ふくれ雪はもりにかて　通茂

かきくもる雪のへ鳥をもりてはゝや雪ふるゝひろふるかりの人

立かへり雪しやとゝんとけすてゝみ山のなかのうちそれは鳥来

雪をよそくゝは志のふるかとき狩衣の小野の中のすみのもとを　光雄

たなひのくもゝすむみかりの鈴の音もいつのたか人　実業

松梢乃とすゑはいくはしたか此ちら梅も雪乃友よいなれと　隆尹

かりくらしわたりわかうくなかりきわかねかきのこゑれあらくさ　基賢

狩ころもあかれしの乃此たちすくて袖ふるこれく雪ふりく　時成

くれなゐかこりとおりかりにわかねかへるのたか此ちらすひ　時方

我かへるね人もかりの玉乃あとゝはすむ軒の雪此ちにかんれ　有綱

そらの人もわかしは此ち狩の市やかくかよる雪のあら紫　実陰

とりせかく軒の雪乃ふる乃をちらもそこてあるたか人　行豊

狩場風

風あらきかりのすゑはくれそてゆふさたかる雪れあら葉　雅朝

立かさの袖りや何しもあれくも心もてかりくに雪を軒風も　通茂

世くのあらき人を風のあさふるにゆきこつかうなかこうわと

なくしいのゝふりくとる此きてゆきも嵐かきつくくりかく禾　重條

雪中鷹狩

たつしきはたちもかへらぬ友なくてそことしらぬのたかゆくすゑ　玄種

かりのこゑのかりもそをはやらたかせ来鳴く宿もなかりけるかな　慈仍

鴫場雪

うらわたりかりくもりて風のうへてはねかくかすかなるかな　通躬

鴫場霧

あさとりうへもかくそれのありかへてあきはくさぬるのかりかには　仙洞

夕鴫聲

うつらなくかこちのかりもこれはよるひきのさきれし氣もすそまて　仙洞

夕ほとをくるゝをちゝとおものかたとおもかけに　通茂

とりたてゝ袂ねやせましかりもくにかこちの浦にたまたまも　隆尚

みかりやゐるみちらすまんてねまて夕くれふかくはうかよし　重條

寢鴫月

鴫たちのそふてかりもなかりしねともうへかねかりくもすみえん　後水尾院

鴫くらしもはたにともり山さゆりわしを袖よりやかして　通躬

暮鴫

あはれにはすつりともしらぬしきたつ野のへのたそかれのかりへ　後西院

野鴫鴫

かりかねもなくてあや風ときさむ人もかくさ野の君ささむくとも　弘資

なくしきのかたやつくかはいるかりかのかねのかけ山下に　雅豊

炭竈

とふ人もいへはされてすみかまのけふりよくしむ雪のあけほの　道晃

一ひとつの煙のけふりたえにて末のけにくゆりおほえのおすくなる　宗政

よの中にふりけるやすみかまのあさゆふくにいかてすみかまの

すみやきの夕けふりたえかひしをみつ山風　光友

ありしやまかうかのあしたのかけるかたありもゆく楢のすむ　弘資

鳥もやのさとの里人のことをくれやとみすくなる　親顕

かりつの里にもかかくさせてくちはもとむすみかまの山　通茂

雪まよふかとの山風にふきしくてかすみかまにたつ煙　二親

すゝかけのふりしやとにたつけふり夕かけて○雲そこゝ　飄章

里遠み夕けふりたつ山もとを松ならてはたれかすむらむ　蕃長

月もさやかにふるのゝおのへのかけは炭竈の煙かゝりてそありける　宗臣

あしひきの山のをのへのふるさとに夕けふりたつ山のは　実種

風はやみ炭竈の煙たなひきてそのおくやまにあらし　為信

梅か枝の○にほひもそのうへにたつ炭竈の煙かな　為信

炭竈煙

山さとは人をすまぬ炭かまのけふりはよそにたつ夕くれに　仙洞

夕されはたちのほりてやすらかにかすみてふかきしくれの山のは

幾よろの雪ふりてしめりも炭竈の煙のみそ残るなり　常仁

あみつまやふるきそまやまのすそのゝやまさとに　通村

ゆくてなるゝ山風にたちのほる小野の炭かま

ふりつもる雪ふかき里に炭竈の煙のたえすそかし　定縁

ゆくすゑもなかくたえぬ山風にたつやけふりを炭竈の煙　通茂

ひとつの煙たちそめて夕くれのやまのはにたなひきて　宗臣

まさきのかつらはふ○のかまとよりたつ夕煙あはれなるかな　行光

古炭竈

かよひこしあとたえて梅かえにたつけふりもたえぬる炭竈の煙　為満

ありつゝてすみかまのやまのやくけふりのあはれなるかな　為茂

暮炭竈

山風にたちやすらふ夕煙くれてそかへる炭竈の煙　道晃

埋火

うつみ火のあたりも冬の夜すさまの風は神さひてしつ火　仙洞

たちよるもいかにさむけき冬のよの火桶のうつみ火　基熙

うつみ火のあたりを知らぬ夜はあはれ寒き嵐の風のをと寒さ　基福

あけぬるそむかし夜はのあたりのすみかさねてみよ埋火　通茂

夜寒とてむかしをおもひつゝ火の中もこゝろかよふかさ　光雄

山家をゆふへおもひつゝ火のもとにひとり風のおとをきく　資茂

うつみ火もよそゆく人に親しくてあかつきの夜をいたくをしかな　定基

夜をさむしとまてしてはたれも霜雪の夜ふかくゆく窓のうつみ火　実陰

まとゐして花にうつりし人の春をとも○てかくらかすうつみ火のもと　景忠

くまもひかきわかれておる秋のすゑかさ親しむかうつみ火　意光

うちとけてなかき夜すからおもひしるふところをうつみ火のもと　行豊

深夜埋火

かくてよなかもたけゆくまゝにかきおこしたるうつみ火のもと　後西院

うつみ火のあたりの夜もふけにけり霜いさゝかもさゆる夜の空　資茂

炉火

かきおこしおもひなれてすゝしきもあらはしてや炉に火あかりて　仙洞

あけぬまのかたはた春秋の窓のいろをふかきの窓の炉の火　実業

たえすしもしふれてそ春のこゝろをもてなす夜やおのつから火のもと　輝孝

炉火忘冬

さむき夜のなかに日もしほのそこたかさはなをかすむ窓のうつみ火　通茂

炉火似春

うつみ火のあたりは冬もねやのうちにかくてはるさとのかの春　通茂

向炉火

雪とまれ春をまちつゝ松行もうつみ火しらぬ冬のあかりと　後西院

まよひつゝもへかへしてもとくにしへのひとをおもひよりうつみ火のもと　仙洞

冬のきて年のうちのおいの身のありかたへしもむかつはひ　通茂

うつみ火のあたりの春にさそふすゝのそとりも霰むおりりを　実業

かきたてゝむかへりとやうつし春はよそむかふならぬ窓のうちの火　通躬

鉢のおもはいはくの山よそやまさらにいてもうかゝはたたく火　為綱

此くても梅がえの風をいとはれぬ仙わかりかれをそ埋火のもと　永福

こゝろなきひとりまくらのこゝろとも日にまかせさゝふの埋火　公長

かきたてしむかふもむりかてやふくあさそさむき窓のつゝひ　光栄

雪わけしさむき秋はやたゝ窓もあつてころよあかん埋火　為淳

炉辺閑談

うつゝ世のゆめとてし世渡りをおもはぬあるは定めなかりの　仙洞

おもひやる人のうちもかくしおくへぬむつごとりそくつゝ更けゆく　基熙

世をすくふ花の色も川おもはれしにしるしもけさ枝の色もと　兼熙

さやひとりおもひはてゝふたつゝ世のみちおもひてしえらわれも　資茂

身のうへもしかりおつゝ末にてもおもふ秋おもひゆくうつゝ世の中　実業

坐立妙意

この秋もよりつむ老のさかひけるはまことみふかぬ理世人のうへと　豊長

神楽

今もなほ神代のまゝにみとめてうたふ本末なかなる君の声　後西院

あかしのしかまそ此のうつりかゝまつくものゝ神の心おもひへん　仙洞

ふるまひの声よりもしかく鳴らう神のあまたのうたふ神楽　信尹

とく雲もはらひあかさつゝ光くにうたふ声よりも明りの空　兼熙

神うたやうたふよりおもしろき人の声すめる秋の夜の空白くさせ　有維

りろ人のうへに声のこおる星けむりうすくあくおそくらか

あつめぬるも秋くれにもの音に神代おもひてうたふ声ぞ　氏成

神代ゆきておもひ出られておもしろくうたふ声よりあかす夜の戸　通村

あはれとも神はきくらむここのへのおほうちうたふ末の声　通茂

あけぬらしはつる声のきえゆくもおもしろやしばしかゝる神

篠竹のさむしろの声はむすへも神やうたれけてきくらん　光雄

神あそひ神のまゆもおもしろくなをうたふ声よしまめの声　経茂

たえぬそのかゝりとのまつ神もさはしらぬもとうつすおもかけ　実業

松風のさゆりはしきさしようつゝ神も君とのうちあたらん　氏信

君か代にまさる色へきはしきぬあれうたふ九重の庭　資茂

里うちもすみわたりあさのこゑとおもはれしの神代もそれ　実陸

神あそひにうつてや九重の庭火のまへにかさしはしき楽　景忠

清士のさく庭火とうたふ末の声おもしろく神のすゝらく　宗記

月前神楽

まさこに神代の月も照てこよひの庭火の影うつらぬ採楽　実陸

暁神楽

さかき葉の霜夜の庭に出すみて明かたちかく宮うたふ声 泰勝

とよ宮の明かたちかきとこ世の人に霜ふらしまつる神くら成 公跡

夜神楽

笹の葉をかさしの庭におもしろくさゆる霜夜すゞしのかりてん 後水尾院

月影のむかふかたへて深き夜のあそひも庭に行ゆく 道晃

杜神楽

神さひてすみわたるゆふしてもとする声に宮すゞしかる杜の声てさき 縄平

すむ我も杜の声あかぬかりそへしうたふ神楽か声更ゆかし 邦永

神かきやみそきさかき[illegible]ひ更にゆく杜の声さかき葉 通村

仏名

いつよりかあらためてねかはん百歳やこん世の仏名のたのみて 素然

さむき霜夜ふけゆくまでもとなへつゝ三世乃仏の数やかそへん 総光

霜夜仏名経

うかそくもさむへなるつく小夜ふけて野中の神やいかさむらん 資茂

早梅

冬なからさきよかしとて咲梅の花はやもふれ春をまつらん 仙洞

春まちて雪をもあらそふさく梅やさえのかほも春まちかねん 道晃

ねよやら冬とかりてや君のくらにいつ咲かくむめのつほみ 素然

冬をまたいはくの春をせてゆくする冬の春のおいひてこひらく梅かく 光康

うちひらも三かしいかに咲かせてちやとそ色とかは梅かく 通茂

春まちる梅かほさきかりてよせのかをりも菊の花乃はなさも 実業

さかつ咲かくらひとりかにく梅は春とりわかまつこゑさに 通躬

あるかたく咲かなりに梅のとかちかく春まつ君かときよ 為綱

花さかしとおもひいまてし冬ふかもうえいはるの梅もしくこ 実陰

まつひとのしるともにさへよの内よいかり春とさかる梅かえ 景忠

君かくらにいろつくしあやわかる風もちる春ものこる花さかん 実岑

年内早梅

まちこてそれともまたへかをらしぬ宮のまつえにさける梅か、 雅豊

早梅薫風

春あさきやとのこすゑにはまたさかて匂ふあらしのかをる梅かえ 惟永

庭早梅

うつりゆく宮のうちにはよそよりもはやくさきそふひとのやとれ梅の 章仁

梅告春近

ゆきちるもまたやむさめしにてをるかみにそへて梅かゝかさなり 光栄

雉

夕まくれ春の山かせの山風に雉のなく声をきゝあはれなら 通音

年欲暮

あらたまる年をまちて見ることのみに身はやくれなん 業然

あやなくもまつてふ年のゆくもしらすはや年ありて(?)ひと 時成

おろかなる身のそなへくはのみ十とせもちかく経日数より 基量

いたつらにあらしの風の身をいそくれぬとや年のそてゆらん 秀賢

おしめともとめもえぬ年の暮ゆかはかりくれてけりな 惟庸

寄雪

あられ降るのこるもくれ待つさら庭てちまつる老の袖をと 後水尾院

まのゝかれ日数すくるいつかたにとまりてはれやらまん 仙洞

ふるまゝに松すゑにいつくもかくそめの雪そふかき 基熙

ふるまゝにくもりわかぬはうくらんとかのあかるらん 弘資

人そしれなくさむかたにつに雪ふらんもしらぬ身を 通茂

いまそてゆつら年の末代の神もあかし雪やけまん 実業

むかしけさ世のいとかしは数をひて雪ゆくをそ払ふ日のかさ 為綱

なかふれとひかすまゝふるのひまの道はやそあれ 実陰

花りみかうらゆりつのまて世の雪かはなきさ日数なかりけれ

やすくらぬ世のをやさにいそくれてゆらんそいくかふるき

寄雪暮

くれてゆくとや庭にりもたにしはむ雪は佛の身にや流るらむ 通茂

惜歳暮

暮ぬとて日数かそへしきのふ世のことはりいまさらにして　後西院

浅のみかくもえぬ身として我よはひ惜まし年の暮そかなし　道寛

ありありて今とかさぬる五十の行末なをさきそ思ふ　通茂

惜しめるそのうつろひを七十のさかひにちかき暮そとしとし

おしまるる身の老の海もかはらぬ暮の年はおしまれ

きみをそてもたのみやまかそとかりにしのふる暮しておしむしんき　光雄

うれてゆく年はいそ惜まれなからなにはしておしむしんき　実富

忘れてもやちかつくるなく心あてにしるしもなき年なからも　資茂

ゆくとしを惜むおもひにわたるのは老のうき世にしきりけん　相尚

歳暮道

いそくとて年もこしかたのゆくすゑかくそ思ふらき　仙洞

歳暮窓

またとおもて窓こそ日数てかそへ雪おもかれくれゆく影そすくるさ　資忠

きのふも今日もくれぬるしの暮や見えぬゆく末のつれつれは　通茂

なれきつる窓やうちもえぬ年も暮ぬるやくれそ暮行　宗量

詠くる年の窓のうちにふみをし年の名残をそれはかなしも　実陰

山家歳暮

年はいつもこの山の年も松もうらやましきこそん　賢仁

なにとりおく年は山より出しゆくや年の日数をとめぬ流れりて　淳房

関歳暮

あふさかやせきもつくされてゆくとしをゆるさぬ関守そをしき　道晃

歳暮澗水

とちそへて流れよりむかへの川をゆく年の流れてややとめぬ　雅章

歳暮旅泊

かりねとも旅ねつきもりを年波のよるへにちかくなちろ入りぬれ　後西院

年月のゆくりのかへりやこえぬるのみかへしとの　資茂

河歳暮

あくふそよはかなくむすぶ川のこほりとけしぬる霞は春のなれて 為綱
あるとみえぬとや人のまつ川ゆく霞の浪のいろにつり舟 氏孝

河霞

ゆく人のたえたりさそふあゐのまれにて日数ふるかこの霞はさびし 基長
霞のもとや霞かゝれりにほふ霞のなかりありる春の袖ふれかは 永孝

家居霞

霞ふかきそこのりやすく入月も日もなくかすむあさかすみ 通茂
ひとはいかゞかれてるやともむかへてさきをとめのそらへかくれる 為親

都鄙霞

うらかくれかはやとともにおもふ霞ゆく霞もあむかし 光雄

紀(?)寄霞

下せはるのゆくてくれのかりしてはく来しかそふそうけに 兼煕

市(?)霞

袖かへて霞のうちひさしむ市にもかりなひはそくかへてかさなる 光広(?)

寄霞梅

雪まちし霞の門にさきそめて霞の色にかすみてよそにもかほる梅かえ 資茂(?)
霞のうちにほふ梅かえはこにかほりそれわかくなかほるやうひ 雅喬(?)

寄霞松

かさむさわしきまつのとかくうちにくれゆくかすみまかふ 仙洞
霞かゝる門の松をいはせは春のみどりや門に移るらし 資延(?)
ゆくやとへなかぬ浪のかゝる松をもわしはそのやとりくやよる 通茂
春ちかく猶かすみつゝ霞のまにまのれてひく世のかけのはれな 実業
霞かゝる霞の松よりはこの小松原子日ふるかきとてまつし 淳房
ふるとても霞しのてふのまの下せはるのまつもとも松やかすみぬ 実陰

老後霞

ふるのこ花の春のかれやしのむれからは霞れなよふかりつ 実業

春湖(?)上

ゆくやまのかすみしらさまのなかのかにはるまでの春のそともなし 光祐(?)

巻已下講

打なびく日かずかさねて行年の一重なりに是ぞさとく　道晃

除夜

拙かる身の老よりていろ葉のやくもきえのおやみ　仙洞

打こえてことしのかはり山やまのゆくへもことしうき　宗然

きのふよりけふにたちかへる数ごとに年もあらたまる　資慶

まこはゆくこよひの灯をかゝぐのこるほどにぬるとしのかな　実業

冬月

冬のよをまつのみどりとはなやかに人やむすぶとちらしなくぬ　資豊

冬さえて雲のはてにかゝるそらのあさくめる月乃影　実業

冬星

ゆくさめくる星のやどりもれてひかりをさらに見えすれぬる　仙洞

冬菊

咲ものこさぬわかれのはなそそへてたれにさく菊のめでたき　実陰

冬暁

宮さびしよ庭の田のほとり秋くれし霜の月さえたるあけほのゝ庭のかげ　基賢

庭の面にしもさえて小萩のさがりてゆく秋をしのぶ袖の香　実陰

冬歌

言ふにくさもかれて秋のさかりはむすびし風のさびしさ　通茂

冬旅

立のぼる山のむかひも分けし此やどりのあさぢが原　幸仁

冬風

吹くるは松の木末にたかくなりけりさむしさ　通村

宮の秋ゆふべもさむき冬のよの木の葉をさそふ風ならば　通茂

冬夕風

夕日さす雲の末にかゝりて雪の山ぞさむき夕風の山風　雅章

冬夜長

袖さむしあたゝかき世の冬ながら夜のながさに　時量

冬野風

しも枯のをはなかすゑも冬かれて風はさむさをますやまの原　通茂

冬地儀

ときはなるみねにはかはるしてもさらに冬のこすゑはおのかたへゆく　通躬

冬暁山

雲のあはれもかくつゝむにほりそらしとおもふ冬ふかき有明の月　基熙

冬野

狩人はいつも冬野のさとの野をわけてこし人はらふ霜のさやけさ　基熙

冬瀧

みなかみは嵐の峯もさえかへり冬よりそめてこほる瀧の白いと　光雄

冬浦

しほれしは夕まくれにて浦風にさむきとのせなる舟のいさりあま　後水尾院

たえ〳〵て冬すさむ浦風もさむくなりやみきはの松のかけ穴

いとまなき浦の舟人さしもまたよそのめにもあはれなるかな　季賢

冬江

鴫のたつ江に秋のあはれは冬かれの蘆沢の月にのこる夜かな　実陰

冬井

さゆる夜はふる板井の清水むすはれて氷にもあるけさの松風　幸仁

冬植物

枇杷

うへし花のこすゑも冬はよそなれてひとりさくひはみへしられ　通躬

冬ながら遠の道のちらちら月影そめて枝になほ白き花かな　後水尾院

冬柏

いつしかに冬されはてて色かへぬ松の霜のこすゑに花やさかまし　言光

冬桐

ちりそめし夕風よりもさひしきは桐のこすゑにのこる朝霜　基熙

冬竹

霜かれの草にまかひて冬こもるしめゆふ竹の一むらそこ　為綱

冬動物

松ちしや鶉鳴くらむ霜のうへにかゝるねぬ夜の夢もさめしさ　後水尾院

袖さむみよはしの床にねすゝむ車も音もしとふかくこそや寂く　通茂

冬鳥

山さとは今朝の木葉もふりそへて人こそとはね孫もとく鳴く也　後西院

ありつゝる我山の峰の夕くれに何をこのりかへるむらすゝみ　道晃

冬鴛鴦

梅か枝のかさ人毛もいつれ冬の田面の鴛鴦の一つ連　為綱

冬獣

紅葉ちりさへうちやまの霜なれやふすく梅ともなく家のあしれ　資堯

老ら竹小うき山路のゆく鹿とも老らすかさねそてやさん　親顕

冬虫

とりあへすともさむらし霜なれは冬のよく我に声をたつく　雅喬

冬車

音ふけゆく炭つゝ車はしりも七夜やけふもかたやむらん　幸仁

冬鏡

そむきてよ月の秋の霜ねたり水も立ちの人の影なしうか　行豊

冬猿

とらふる枕の山さともなく鳴きる霜夜の空はなきかもくさ　光久

冬虫

冬かれのみきりさひしき庭の松もちりぬの虫そ鳴くよ身にしれ　資堯

茶もあつむこのくらぬ霜かれに風の音さへかはりゆくかな　通茂

冬園籬竹

風わたる桜さむの園よ孫あめてかそぬ音もなをそさしか　有維

冬眺望

やまさの高嶺かるる夕に遠かるゝ袖も白き夕暮の　類孝

野行幸

立ちさとの… かけ… 代々ふけて…ゆきふかれか跡をよる　通村

しく毎よ花のちられてもゆき也むかしにかへせり川のなみ　通躬

みそきやあさ川袖をはらくにあか遣あ木と花ゆき雲そえ　実陰

維摩会

神無月ふりもあくせをくてらし伝へし法は君か代のため　通村

五節

ひかけへのをとめかみすゝおりもいさわたくぬか雲ん西塔　仙洞

をとめ子か雲とあくらると袖のよふちりくる花を豊よ舎はく

豊明節会

ちよよ今ぞ人の世をとあ祈ますの川袖かるさためしを君か為して　後水尾院

いそらの代よ人さんとあまよる袖かるしとやさきもりしと　資慶

いろかれは世ゝのおかれたる花す夏ぞすり衣そ子そあきん　嗣長

国立公文書館
National Archives of Japan